

# 集団参加型イベントにおける「場」的原理による関係生成様態： 一人称的記述の実践事例からの考察

Relationship-Building Through *Ba* in a Group Event Context:  
An Attempt of First-Person Description

河野秀樹

Hideki KONO

---

## キーワード

場、一人称的記述、自律的關係生成、エピソード記述

*ba*, first-person description, autonomous relationship-building, Episode-Kijutsu

---

**Abstract:** In describing the function of *ba*, as a generator of global frameworks of relationships among members of a group, previous studies have attempted to make the outcome of the interactions and collaborations visible by employing objectivist methods, through which the researchers collected quantitative and qualitative data from external observations, and analyzed them based on arbitrarily set up criteria, to discuss their compatibility with the *ba* theory. However, such approaches entail the defect of not being capable of describing the ongoing process of relationship-building through *ba*. To overcome this methodological limitation, this study presents an alternative approach that describes the state and process of relationship-building process in *ba* from the first-person perspective. This will facilitate the viewing of the actuality of the *ba*-based relationship-building process that have not been captured from an objectivist perspective. Specifically, using Kujiraoka's (2005, 2013) Episode-Kijutsu (Episode Description Method), the study describes the relationship-building process among the participants of a "water balloon fight" event, which accommodated multicultural team formation, and discusses its usability as a method of describing the *ba*-based relationship-building process in light of the theories concerning co-creation and autonomous relationship-building through the *ba* principle. It also indicates its limitations and implications for its application in related areas.

## 1. はじめに

異文化間の関係構築を図るうえで、自他の思考や行動を規定する背景要因として、その所属社会や集団の文化的特質を体系的に認知諒解しておくことで、文化的差異にもとづく誤解や摩擦を可能な限り回避したり、文化の違いに起因するとみなされる実際のコミュニケーション上の問題への処方のためにそうした知識を動員する、いわゆる「異文化理解」型のアプローチが関連分野で長く称揚されてきた。河野(2013, 2016)は、それらが文化的要因以外のさまざまな要因が絡み合う現実のコミュニケーションのダイナミズムをとらえきれないこと、また、それらの多くが文化本質主義にもとづく固定的な文化観に縛られてしまうことで、相互作用を通じた新たな集合的文脈性の共創という、多様性をもつ創造性への可能性を扱うことができない点に言及し、生成的視点を欠いた異文化理解型アプローチの方法論上の限界を指摘している。実際、Blumer(1969, p.87)が述べるように、構造的特性としての文化や社会システムは、行為の条件は設定しても、それを決定する要因とはならないのである。

一方で、そうした固定した文化観にもとづく構造主義的なアプローチと論理上対極をなすものとして、多様な個人や集団間の接触場面そのものに焦点を当て、そこで生じるさまざまな相互作用を通じてどのような意味の付与と交渉、役割の創出と認知、自他の行為への評価が行なわれ、それらを通じてどのような集合的・社会的文脈が形成されるのかを見極めようとするアプローチが関連領域での一つの大きな流れとして存在している<sup>1</sup>。そうした、広い意味での構築主義的アプローチに通底するのが、文化とはある特定の集団に共有される思考や行為の固有な形式ではあるものの、社会的相互作用を通じて創出、刷新されるものであるとの動態的文化観である。たとえば、Shibutani(1955)によれば、ある集団により共有される「パースペクティブ」としての文化は、静的実在ではなく継続的過程であり、社会的相互作用を通じ日々再確認(reaffirmed)されていく。その意味で、「文化とはコミュニケーションの所産」(p.564)である。文化を集合的文脈の遷移的均衡という動的過程ととらえるこうした視座は、異文化間接触においても、多様な個人および集団間の相互作用を通じ新たに創出される文脈性としての文化の形成を研究対象とする可能性を許容しうる。

このような動態的文化の創出には、多様な背景をもつ個人および集団間に共通な文脈性をともなった関係が構築されることが前提条件となると考えられるが、この関係構築のプロセスを研究対象とする場合、そうした関係性を生み出すメカニズムを説明する何らかの論理が必要となる。その一つとして、多様な個人間に自律的に集合的文脈性<sup>2</sup>を創出する原理としての「場」(清水, 1999, 2000)の作用があげられる。「場」の作用を通じ生成されるそうした関係性としての文脈性を、共創された文化ととらえ、その様態を記述することで、生成的側面に焦点を当てた異文化間コミュニケーション研究へのひとつの道が開かれると考えられる。

ところで、この「場」的原理による関係生成の様態の記述には、出来事の当事者としての視座に立った、経験的事実の描写が不可欠であるとの指摘がなされている(河野, 2016; 三宅, 2000; 清水, 1999)が、一方で、同記述に関しては、これまで具体的な方法論の提示と実践にもとづいたその有効性についての考察はなされていない。そこで、本稿では、集団参加型イベントにおいて多様な生活・文化背景をもつ参加者間に生成する関係性としての集合的文脈性を、「場」的原理により創出されるうるものと措定し、まず同関係性の様態の記述が当事者としての一人称的視座からなされる必要性について論じる。そのうえで、その具体的方法論として鯨岡(2005, 2013)の「エピソード記述」を援用して稿者が行なった記述の結果を提示し、記述された関係性

の性格と「場」理論との整合性を検討するとともに、「場」的原理による関係生成の様態の記述法としての同記述法の有効性について考察する。

## 2. 先行研究と研究の理論的枠組み

### 2.1. 「場」的原理による自律的關係生成の図式

所与の社会文化的文脈の共有によらず、物理的空間を含む特定の状況を共有する個人間および集団全体に一定の秩序をともなった関係性を生成する原理としての「場」の作用に論及した、関連分野での研究がなされている(伊丹, 2005; 河野, 2011, 2012; Kono, 2008; 野中・紺野, 2000; 清水, 2000; 露木, 2003など)。本稿では、「場」を、状況的要因を共有する個人からなる集団において自律的にグローバル(大域的)な関係性としての文脈性を創出する原理と定義し、以下にそうした「場」の作用とそれによる関係生成のメカニズムを概説する。

清水(1999)によれば、生命システムに普遍的な性質の一つが、一般に「自己組織化」現象として言及される、システム自らが系全体の秩序を自律的に作り出すことであるが、ここでいう「秩序」とは、「要素のふるまいやはたらきのあいだに、コヒーレンス(整合性)が発生すること」(p.22)をさす<sup>3</sup>。ただし、生命要素の生み出す秩序は、多くの物質の結晶に見られるような静的なものとは異なり本質的に動的であり、外部環境の状態に適応すべくシステム全体も変容していく。システム全体にそうした文脈性を生み出すためには、システムの構成要素間だけでなく、各要素とシステム全体とのあいだにも整合的な関係性を生み出す必要が生じるが、その際、個々の要素のふるまいを、無数の可能な選択肢から、要素間および全体とのあいだで整合するよう絞り込んでいくはたらきを担っているのが「場」の作用である。このはたらきは、個々の要素にとっては自らのふるまいを限定する拘束条件でもあるが、それは、生命要素がシステム全体に照らして自らの位置づけを自覚するかたちで把握され、そのとるべきふるまいの方向性の指標となる。個々の要素は、他の要素との間合いをはかりながら、自ら感じ取ったこの方向性をもとに自己の役割を認識し、具体的行為を決定していく。一方、そうした、システムの状態との関連づけにたった個々の要素のふるまいが、結果としてシステム全体の秩序としての文脈性をさらに精緻化していくこととなる。このグローバルな文脈性の創出は、上述のシステムと要素のあいだの循環的相互作用を通じ自発的になされる点で、自律的過程である。これが清水の提示する「場」的原理にもとづく生命システム内の自律的關係生成メカニズムの概略である。

この「場」的原理による自律的な関係生成のメカニズムが、関連理論では人間の集団を含む生命システム一般に普遍的にみられるものとして位置づけられていること、また、「場」の生成にあたり取り交わされる情報が、基本的に言語などの記号によらない、身体性のレベルで授受、共有される性格をもつ<sup>4</sup>ことから、「場」を介した関係構築が、一般に認知された文化集団の枠を超え、汎文化的、さらには間文化的に成立しうることが想定される(河野, 2013)。

河野(2012)は、清水らの場の理論をふまえ、「場」を介した関係性の自己組織の機能上の特徴として、①各個人が自己のとるべきふるまいについて一定の決定権をもち、他の構成員と対等な立場で自己表現を行なっている、②各個人の表現が他の構成員と整合的となるよう自己調整され、集団全体としての表現に寄与している、③個人間で身体性を介して、暗黙知のような非記号の情報の共有が行なわれている、④活動の方向性が構成員に内面化され、当事者としての立場から理解されている、の4点をあげている。これらは、「場」的原理による関係性の自己組織が起きるための必要十分条件ではないが、同現象の存在を確認するための指標となると考えられる(p.78)。

これらについては、後節で提示する事例における「エピソード記述」の内容とこれらの特徴との整合性を検討する際に再度引用する。

## 2.2. 「場」的原理による関係構築様態の記述法としてのエピソード記述

### 2.2.1. 「場」による関係生成プロセスの記述法としての一人称的記述の意義

「場」を介した関係生成のプロセスを記述するにあたり、その視座が「場」の作用が及ぶシステムの内部者としての立場にもとづく必要があることが、関連の先行研究で論及されている(河野, 2014; 三宅, 2000; 清水, 1996, 2000 など)。それらに共通する方法論上の立場が、「場」における文脈性の共創とは、そのプロセスに参画する当事者としての視点からとらえられるべきものであり、自己と切り離された対象として記述されるべきものではないとする見方である。それは、同プロセスが、自他非分離的に作用する「場」のはたらきにより、参画者が自己のあり方を発展的に更新しながら協働的に新たな文脈や機能を創出する過程であり、自己と切り離して理解されるものではない(三宅, 2000, pp.372-375)こと、さらに、関係生成をとりもつ「場」の情報が、暗黙知<sup>5</sup>として言及されるような対象化できない種類の情報であり、個人が身を置く場所の状態を反映した自らの内部状態としてのみ認知しうる(清水, 1996, pp.68-71)ものであることから、「場」における個々の成員と集団全体のあいだに生じている動的な相互作用のプロセスを記述対象とする場合、同プロセスに身を置く当事者としての視点が求められるためである。

こうした方法論上の立場は、「場」の作用を記述するうえでは、出来事への参与者としての視座からの状況の内観的記述が、「場」を通じ創出され共有される文脈性の特質を反映したものであり、それゆえ個を超えた集合的含意を帯びたものとしてとらえるべきものであることを意味している。上述のとおり、この状況の内観的記述とは、記述者自身の内部状態を状況(場所)の全体的状態を反映したものとして記述することにほかならない。清水(1996)によれば、同記述は記述者の「身体に映され」(p.69)た場所、すなわち状況の態様(これには成員間の関係性も含まれる)であり、場所の印象、雰囲気など情意的要素をともなう心象の表出であるが、これは明確な対象をもたないかたちで一種の身体知として自覚されるものとなる(pp.69-70)。こうした自己と状況との関係に根ざした自己言及的な状況の記述は、自己をその一部として含む状況への直接的言及であることから、いわゆる対象化された自己に関するメタ認知とは異なるものといえる<sup>6</sup>。その意味で、関係生成を含む「場」の生成様態のリアルタイムの記述とは、観察者自身が感受した経験的事実を自らの主観的視座から描出するという点で、一人称的記述としての性格を帯びることとなるといえよう。

こうした、出来事への参画を前提とした一人称的記述を、方法論上複数の読み手の理解を得るに足る一定の共同性を有し、学術的文脈で研究および議論の俎上に載せるに値する意義のあるものとする知見が、近年複数の関連分野で提示されている(Davies, 2002; 鯨岡, 2005; 諏訪, 2015; 内山, 2007 など)。本稿では、そうした関与的観察者の視点からとらえた出来事の様態の記述法の一つである「エピソード記述」(鯨岡, 2005, 2013)の手法を、人の集団に自律的に創出される包括的關係性としての文脈性の共創、およびそれに随伴する当事者間関係生成の様態を記述するための方法論として採用し、稿者の行なった集団参加型イベントでの観察にもとづく、出来事に関する一人称的記述内容を、「場」的原理による関係生成の様態の記述事例として提示する。

### 2.2.2. 「エピソード記述」の目的と概要

鯨岡（2005, 2013）は、発達心理学などの領域で従来の行動科学的アプローチが捨象してきた、実際のコミュニケーションの場である「接面」に生起する、情動や心象をともなった心の動きにかかわる気づきや体験を生き生きと描き出し、さらに、そこから立ち現れる諸々の問いに関する考察を通じて、描かれた事象の「意味」を掘り起こすことを目的とする一人称的記述法としての「エピソード記述」を創唱している。

その記述対象は、観察可能な行動的事実だけではなく、現場に身を置くことで感受される、関わり手とその相手にとっての「いま、ここ」での思いや気持ち、相手の固有なふるまいのあたえる印象、さらにその場に醸成される「生き生き感」や独自の雰囲気など、観察者の主観においてとらえられる体験的内容となる。鯨岡によれば、これは人と人の「あいだ」に生じているものを観察者が感じ取ったものにほかならず、相手が感じたり思ったりしているその生のありようを、観察者である「私」を通じてとらえ、「私」を通じて表現することを意味する。こうして把握された他者および現場の状況の様態は、他者の主観の動きを「私」の主観において掴むという点で、「間主観的に把握されるもの」（鯨岡, 2005, p.16）とみなすことができる。鯨岡は、自らが深く関与してきた保育の現場で、保育者が子どもに対し日常的にこれを行行使すのを観察するなかで、他者の心の動きや状況の様態の間主観的把握の実効性を確信し、実践者および研究者にとっての間主観性<sup>7</sup>にもとづく他者理解の必要性和意義を強調する。鯨岡は、エピソードを記述するにあたり当事者的視点でなされるこの観察方法を、Sunllivan（1953）の「関与しながらの観察」になら「関与観察」と呼ぶが、鯨岡（2013）によれば、同方法においては、観察者自身が他者との代替の効かない一人の「生きた主体」すなわち一人の当事者として現場に臨んでいる事実、その独自性が求められる（p.42）。このように、エピソード記述とそれに先立つ関与観察においては、「自ら人の生きる場に身を挺して、その接面において感じられるもの、得られる気づきをエピソードに描き、あるいは協力者の語りを切り取って、その意味を掘り下げる」（p.43）ことが、研究者にとっての一義的な目的となるのである<sup>8</sup>。

鯨岡（2005）によれば、「エピソード記述」の構成は、対象となる出来事の前関係、登場する人物や事物とそれらの背景、記述者と出来事および関連する人びととの関係などを述べる①「背景」、関与観察者が感受した他者の気持ちの動きや現場の雰囲気など間主観的にとらえた要素を含む、出来事そのものについての記述である②「エピソード」、エピソードで示された事象の意味を超越的見地から考察する③「メタ観察」、の三つの部分からなり、通常、①→②→③の順に記載される<sup>9</sup>。

このうち、具体的に「エピソード」に盛り込まれる観察内容とは、出来事の経緯に関する記述に加え、現場で起きる一連の出来事のなかで、「地」としての出来事全体から何らかの「気づき」として観察者の意識に上った事象を「図」としてとりあげ提示したものが中心となる。これを鯨岡は「意識体験」と呼ぶが、そうした意識体験を含む観察内容の記述にあたっては、事象を対象化して脱自的にとらえる見地と同時に、「事象の下に何かを感じる」（鯨岡, 2005, p.73）見方、すなわち他者の心情やその場の力動感といった、間主観的に観察者に感じ取られるものをとらえる姿勢の両面を併存させることが必要となる。鯨岡によれば、一人の観察者の中である事象が「図」として意識化される裏には、その観察者のもつ経験の歴史、関心、研究上の理論的枠組みといった固有の背景がはたらいており、その意味で、エピソード記述は共に生きられた一回限りの生の記録となる。

最後の段階である「メタ観察」では、エピソードに記された内容が、観察者および読み手にと

って何を意味するのかを多面的に考察する。具体的には、観察者により記された意識体験に関し、なぜある事象が「因」としてインパクトをもって意識化されたのか、さらに、研究者としての参加者の関心や理論の枠組みに照らし、その事象がどのような位置づけをもつのかを吟味する。これにより、事例として記述されたエピソードは単なる個人的体験の記述を超え、記述された内容が観察者の問題意識にどう関わり、より広い学術上もしくは実践上の文脈においてどのような理論面との整合性や応用可能性を示唆しているのかが明らかになるとともに、そうしたエピソードの意味が読み手にとって了解可能となるだけの一般性を獲得することとなるのである。

このように、「エピソード記述」は「従来の実証科学とは根本的に異なる事実の提示の仕方」（鯨岡，2005，p. 44）をとるが、それは、人と人の接面で生じていることを、その一方の当事者の立場から描き出し、実践や関与のありようを吟味することで、従来の客観主義的アプローチでは扱えなかった個人の内面および個人間に起きている心的現実をとらえるとともに、描かれた事象の「意味」を掘り下げるといふ、同記述法の意義に根ざした帰結であり、関与観察者である研究者も、「人と人が共に生きることの意味を探る」（鯨岡，2013，p. 33）という「エピソード記述」の根源的目的の追求に必然的に参画することとなる。

### 3. 研究の方法と手続き

本章では、「エピソード記述」を用いて「場」的原理による関係生成の様態を記述するにあたり、稿者が実際に行なった観察および記述の方法と手続きを提示する。具体的な観察対象、観察期間、観察・記録・記述の方法は以下のとおりである。

観察対象：国内某県S市にあるゲストハウス主催のイベントにおける参加者間の関係生成プロセス  
観察期間：2016年8月のイベント当日（ただし、観察者はこれに先立って本ゲストハウスを3回訪れており、「背景」にはそこでの見聞の内容も盛り込まれている。）

観察者の立場：イベントへの参加者

観察方法：イベント「ウォーターバルーンファイト」への参加者として、関与観察を行なった。

記録および記述方法：イベントの様子を場面を区切り小型ビデオカメラで録画するとともに、イベント終了直後にフィールドノートとして筆記にて「エピソード」の内容に関わる項目を記録した。「エピソード」の記述は、「エピソード記述」の方式に則り、基本的には観察者の記憶をもとに行ない、記述内容の補填のため録画、フィールドノートを参照した。また、「背景」の記述ではゲストハウス関係者（オーナーM、スタッフO）からの事後の聞き取りによる情報の補填を行なった。

なお、関与観察における出来事の初次的記述としてのフィールドノートへの記録は、「備忘録的記録」（鯨岡，2005，p. 159）として行なうものであり、のちの「エピソード記述」作成にあたり経験的事実の想起への契機とすることを目的とするものである。同様に、ビデオ等のメディアへの記録内容も、あくまで生きた経験内容の記述を補強するために用いられる（鯨岡，2005，pp. 173-174）<sup>10</sup>。本事例においても、これらの記録内容は観察者の経験的事実をエピソードとして再現するうえでの補助的手段として用い、逐次的にテキスト化した記録内容をデータとして使用するという方法はとっていない。

## 4. 結果と考察

以下に、稿者による「エピソード記述」として、S市における「ウォーターバルーンファイト」の背景、関与観察の記録である「エピソード」、「メタ観察」（考察1）を提示し、さらにそれらの内容と「場」理論との整合に関する議論を考察2として提示する。

### 4.1. エピソード：ウォーターバルーンファイトでの参加者間の関係性の生成と変容

（背景）

某県北部にあるS市に2011年に開業したゲストハウスAでは、これまでに宿泊客を受け入れるほかに、客も参加できる形のさまざまなイベントを不定期だが継続的に主催してきた。今回取り上げる「ウォーターバルーンファイト」は、ゲストハウスの若手スタッフOの提案がきっかけとなって企画されたが、催行に至るまでには地元の知り合いのネットワークによるサポートがあった。その準備に関わる話し合いも、ゲストハウスの公共スペースを使って行なわれた。

「ウォーターバルーンファイト」は、水風船を二つのチームに分かれてひたすら投げ合うという、ごく単純な活動である。比較的薄めのゴム系素材で作られた手のひらサイズの風船に水を詰め水風船にしたものを、屋外に設定した会場で対面する二つのチーム間で風船が尽きるまで投げ合う。欧米で最近流行りだしたもののだが、すでに日本でも近年いくつかの地域でイベントとして行なわれている。これをS市で行なうこととなった発端は、スタッフOが、以前に見聞きしていた海外でのそうしたイベントを一度やってみたいとゲストハウスオーナーのMに持ちかけたことだった。その後、地元の友人らを中心とした仲間が当日に向け入念な打ち合わせと準備が行なわれた。会場は近くにある博物館の駐車場横の広い草地を借り、そこに当日準備スタッフが手分けして風船を持ち込んだ。博物館の代表もMの知人であり、快く場所を提供するとともに自らもイベントに参加した。

2016年8月某日、ゲストハウスAの主催で当施設として初の「ウォーターバルーンファイト」が、照りつける夏の日差しのもと開催された。当日は合計29人が「試合」に臨み、くじ引きで2チームに分かれて対戦した。参加者は、性別、年齢、出身地ともさまざまで、日本人以外では20代のドイツ人男性が1人、同じく20代のベトナム人の男女7人（うち女性2人）が参加していた。ベトナム人参加者は地元企業に正規の社員として勤務<sup>11</sup>しており、Mが日本語を教えている関係で参加することとなった。彼ら・彼女らは日常的な会話ができる程度の日本語が使えるが、ドイツ人参加者は宿泊客で日本語はほとんどわからないため、他の参加者とは英語でやりとりしていた。参加者のうち宿泊客が8名、残りは上述のベトナム人たちとS市または県内の近隣地域に住む日本人であった。今回は安全を考慮し大人のみでの参加となった。

「試合」には勝敗はなく、自分たちの陣地の風船がなくなるまでひたすら相手のチームめがけて投げ合うだけである。今回用意された風船は合計約四千個で、対戦前には参加者全員で風船を均等に均すように協力して配置した。準備が整ったところで、各チーム内で簡単に自己紹介を行なったのち、MとOがそれぞれのチームの先導役となり、気合いのかけ声をチームごとにかけたあと、各自配置についた。「試合」そのものは10分足らずで終わったが、結果的に平均で一人130個あまりという、かなりの数の風船を投げることとなった。対戦後には全員で割れた風船の残骸を拾う作業を行なった。

今回本イベントを記述対象にとりあげたのは、こうした単発の集団参加型イベントへの参加経験者には自明であるがゆえに見過ごされがちな、多様かつ初対面どうしの多い集団内での全体的

文脈の創出プロセスが、準備から解散まで一時間半程度という短い時間のなかであるにもかかわらず、比較的可見やすい形で表れていると考えたためである。

#### 〈エピソード〉

試合前、参加者皆で水を充填した風船が均等に配置されるよう、袋から出しながら自分たちのチームの陣地に協力して置く作業を行なった。私（稿者）も風船が割れないよう気をつけながら一つずつ置いていたが、移動するにつれ、自然に他のメンバーと会話を交わすことになった。内容は、ほとんどが互いの出身地や職業といった、相手のバックグラウンドにかかわるもので、とくにチームにいた4名のベトナム人の参加者のうち2名（いずれも男性）とは、他の参加者より多くの会話のやりとりがあった。

こちらからは、どこの会社で働いているのか、どんな仕事をしているのか、日本語は難しいか、といった生活の基本に関わることについての質問が多い一方、ベトナム人参加者からは、東京のどこから来たのか、〇県（開催地）は初めてか、ベトナムには行ったことがあるかなど、こちらに関する散逸した内容の質問が多く、それに私が補足的な情報を付け加えて答えていた。会話はすべて日本語で行なったが、彼らは思ったよりも積極的に私に問いかけてきて間があくことがなかったため、間延びによる気まずさはなかった。一方で、いろいろなことをぶつ切れに訊かれている感じで、一つ的话题を深めるような対話に進むことはないと感じていた。彼らが積極的に私にいろいろと質問してくれるので、その点については私がそれまでに会ったベトナム人のシャイでおとなしい印象とは異なり、私にはうれしい驚きだったが、同時に、イベント自体を楽しみなかった私は、それ以上彼らのみと話しこむことに少し抵抗感を覚えていた。そうしたこともあってその場を去って準備を続けたのだった。

一方、唯一の外国人宿泊客であるドイツ人のF（20代 男性）は、準備中もとくに誰かと話し込むわけでもなく、一人で黙々と風船を置いていた。周りの日本人も、彼が日本語を話せないと知ってか、あえて話しかけようとする人はほとんどいなかったが、彼はすでにゲストハウスAを含め日本国内のゲストハウスには数泊しており、日本人との距離感をどうとらいいのかわかりなりにわきままえているように見えた。おそらくオーナーのMに誘われてイベントに参加したものと思われるが、彼の穏やかな表情から、彼自身も前向きな気持ちでイベントに参加しているように見えた。準備を続けるうちに偶然彼と近くになり、私のほうから彼に声をかけた。出身地や今回の旅程などについて質問すると、Fは流暢な英語で丁寧に答えてくれ、彼がドイツの大学院で環境社会学を学ぶ学生であることがわかった。こうしたイベントへの参加はFにとっても初めてのことであった。Fについては、話すなかで私のほうからいろいろと聞きたいことがでてきたが、先ほど同様イベントに集中するため、「I'll talk to you later.」と一声かけてさらに移動した。Fは「OK」といって微笑み、その後もそれまでと同じようにリラックスした様子で準備を進めた。

ひととおり風船の準備が整ったところで、Oが全員を招集し、「試合」の進め方、ルールなどを説明した。このとき、全員が大きな輪になっていて、初めて皆で顔を合わせる格好となった。1分ほどの短い説明だったが、それまで近くの参加者どうしでそれぞれ行なわれていた会話が止み、皆の注意が一斉にOの説明に集まった。説明を聞きながら、時折笑いが起きるリラックスした雰囲気の中にも、皆これから始まる試合に対する期待感をもっていることが輪の中にいる私にも伝わってきた。これを境にして、一団は一気に臨戦モードに入り、お楽しみのイベントとわかってはいてもある種の緊張感が共有されていった。



いったん全体の集まりが解かれ、チームごとに各陣地に集合する。私の属す「青チーム」には、ベトナム人参加者4名とドイツ人Fが入っていた。Mの号令でチームのメンバーが集まり、簡単な自己紹介をしたあとで円陣を組んだ。これは先に行なわれた「泥んこバレー」でもやったそうで、恒例となっているとのこと。皆で手を重ね、「オーッ」とかけ声を合わせた。各自の判断で配置につき、Oの合図で「試合」が始まった。チーム間の距離は10メートルあるかないかだったが、力を入れれば割れてしまうなど、なかなか思うように風船が飛ばない。最初は、うまく飛ばないもどかしい気持ちを、それぞれのやり方で表現する参加者の様子がみてとれた。「飛ばねえ」と叫ぶ者、「難しいよね」と隣に話しかける者、「ううっ」といったうめき声を漏らす者など、さまざまだった。

しばらく(数十秒間)投げていると、参加者の表現は誰に向けてともない叫び声が多くなった。それらの多くは、投げるときよりも、相手チームの投げた風船が自分に当たったり、際を通り越して行ったときに、「うわぁ」、「危ねえ」といった短い独白調の言葉で発せられた。

この段階では、チームの仲間がどうしているかに注意を向ける余裕がなく、私自身も、「危ないっ」、「うわっ」、「やられた」といった短い言葉を誰に向けてでもなく叫びながら、ただ風船を拾っては相手めがけて投げるというだけの単純な作業に没頭していた。5、6分経過したのだろうか、いよいよ残りの風船が数えるほどになったとき、だれかが陣地の線を越えて投げてはならないというルールを犯し、相手側に突撃する形で投げ出すと、多くの者があとに続きルール無視の接近戦となった。それぞれのかけ声がひときわ大きくなり、まもなく風船は尽きた。誰からともなく拍手が起り、全員で拍手したあと、敵味方問わず近くにいる者どうしてハイタッチが交わされた。

終了してしばらくは、試合の興奮の余韻が残るなか、心地よい疲労感と、ある種の充実感に皆が浸っているように見えた。ほとんどまとまった内容の会話は行なわれず、「ああ」、「さいこー」、「疲れた」、「腕が痛い」といった間投詞や短いコメントを、笑顔で近くにいる者に向けて発するか、独白するかしていた。そうしたコメントは、各自が感じた内容を含め、何らかのメッセージを誰かに伝えるためというより、むしろ内側からこみ上げてくる興奮や充実感を発散させるために発せられているように見えた。私自身も、何かを考えてというより、「いいなあ」、「濡れた」など、そのとき一番楽に出てきそうな単語を誰に向けてともなく口にしていた。同じチームにいたベトナム人参加者やドイツ人のFも目に入ったが、個人あてに感想を聞こうという気は起こらなかった。彼らも試合前のような調子で私に話しかけてくる様子はなく、親しい仲間どうして話しながらも、私同様、試合の余韻を楽しんでいるように見えた。

まもなく、MとOがゴミ袋を配り始め、皆で風船の残骸を拾った。作業は5分ほどで終わったが、その間も現場は試合の余韻に包まれていると感じられた。ずぶ濡れのままゴミを拾ってゴミ袋を持った者のところに持って行くあいだ、他の参加者と接触することが何度もあったが、そこでは言葉を交わすか交わさないかはどうでもよく、安心して黙っていられる空気があった。私自身も、試合前のような、このまま相手と話し続けるべきかどうかといった、個人的会話の担い手としての発話の必要性や談話の継続への義務感を感じておらず、沈黙があってもそれはそれでよいという、流れに身を任せる感覚を優先させて行動していた。そのことで近くにいた参加者に気まずい思いをさせていないかといった鬼胎はなく、あるがままの自分が許容されているという確信のようなものがあって、集団の中にながら解放されたような気がしていた。大げさかもしれないが、試合が終わった時点からしばらくは、人、場所を含むその場のすべてのものが調和のもとにおかれ、皆がそれを謳歌しているように感じられた。

この時点では、私は、出身文化や生活背景の違いに関係なく上で述べたような接し方ができるように感じていた。他の日本人参加者に対してと同様、試合までにいろいろと話したベトナム人参加者たちにも、彼らが外国人だからという理由であえて話しかけようという気は起きなかったし、彼らもこちらに話しかけようとはしなかった。ドイツ人のFについては、これまで同様言葉数は少なかったものの、終了後の表情はいつそう和らぎ、笑みを浮かべながら片付けにあたっていたのが印象的だった。私が見つけたアオガエルを「Here's something for you.」とって投げて渡すと、彼はにこにこしながら受け取ってそのまま向こうへ歩いていった。その様子から、互いに出自や生活背景の違いを浮き立たせてコミュニケーションをとる必要を全く感じないだけの同胞意識のようなものを共有しているという実感をもった。

清掃が終わり、Mの挨拶のあと皆で記念撮影をしてイベントは終了した。

#### 〈考察1：メタ観察〉

ここからは、〈エピソード〉の記述をもとに、本イベントへの関与観察を通じて観察者である私（稿者）が間主観的に感受したと考えられる事象を振り返りながら、参加者間の関係性がどのように生成・変容し、結果的に全体にどのような文脈性が創出されたのかについて考察していく。〈背景〉で述べたように、試合前からすでに一部の参加者のあいだには、それまでの付き合いの経緯から一定の個人的な関係性が成立していたが、同時に、初対面どうしの参加者のあいだにも開始前から友好的な雰囲気が支配していた。実際、〈エピソード〉でふれたように、私自身も初対面でありながら何人かの参加者から話しかけられ、十全な参加者として認知されているとの自覚があった。一方で、その時点で私と他の参加者とのあいだに成立していた関係性は、基本的には個人対個人という図式で結ばれたものであった。局所的な関係性が優位であるというこの感覚は、風船を置く準備作業のあいだも持続していた。エピソードで述べた、最初に会話を交わしたベトナム人やドイツ人Fとの関係性も同様で、会話をもったことで彼らへの親近感は増したが、それ以前に私が他の同様の場面で外国人と接触したときの関係の深まり方との大きな差は感じなかった。

こうした関係性の認識が変わり始めたのが、開始前にOが全員を招集した時点からだった。このとき皆が顔を合わせ、Oの説明に耳を澄ますことで、全員が同じ舞台に立ち、同じ目的をもってことに臨むのだとの思いが共有されると私には感じられた。これ以降、各陣地への移動、円陣を組んでのかけ声、実際の「戦闘」という、共通の目的と方向性をもった活動を通じ、同じ文脈を共有しているという、相互の関係性認知の集約的な側面がさらに強まったと考えられる。一方で、戦闘にあっているあいだは、各自の判断で位置、標的、投げ方を変えるという、個人としてのふるまいの選択は許容されており、個としてのふるまいが共通の方向性の創出と強化に寄与するという図式が成り立っていたことになる。このことは、サッカーなどのチームスポーツでは定常的に起きていることが想定され、特段珍しいことではないが、初対面の者どうしがチームを組んで行なう活動でこうした一体感のような感覚が生まれたことは、私としては驚きだった。

参加者のあいだに明らかに共通の文脈性が生じていたことがもっとも強く実感されたのが、〈エピソード〉に記したように、終了後しばらく独特の穏やかな一体感にその場全体が包まれていると感じられた点からだった。試合が終わり、ハイタッチを交わし、ゴミ拾いをして集合写真を撮るまでの10分前後の短い時間だが、皆ある種の充実感を感じながら、それぞれに試合の余韻を味わっていることが、その表情を含めた様子と、場所全体の雰囲気から実感をともなって伝わってきた。この充実感の源泉には、単純に初体験ゆえの新鮮さや、地域で初めてこの種のイベ

ントを成功させたという達成感もあったと思われるが、それらとあわせ、互いの身体がぶつかり合うのに近い直接的な接触を通じ、言葉による情報交換とは別な位相の間身体的なコミュニケーションが起きていたことが大きく影響していたと考えられる。そのために、互いに感想を聞き合うといった恣意的な関与によらず、そのときの身体感覚に根ざした一体感が自律的に醸成され、文脈の共有感へとつながっていったのではないかと考えられる。終了後もあえて沈黙を言葉で埋める必要性を感じず、一方で、自然に発せられる言葉を相手をも特定せずに出し合うという行為が、私を含め参加者の多くにみられ、同時にそれを自然に受け止める状況が存在していたことも、暗黙のうちにそうした全体的な関係性が共有されていたことの証左と考えていいであろう。

こうした文脈性の持続的共有が、外国人参加者たちにも及んでいたことを示唆する場面が見られたことも注目に値する。〈エピソード〉で述べたように、試合前に個人レベルで会話を交わした時点のような、互いを個人として識別し、それぞれの背景や思いを問いたてるような内容の質問と答えを繰り返すといった会話が、終了時点では全く耳に入ってこなかった。これは、イベントの流れから考えればその時点での話題としてそぐわない点で当然なことではあるが、発話内容の妥当性の問題以外に、すでに互いを結び合う強固な文脈的素地ができていたと考えると、言葉で感想をきき合うことがそれほど必要と感ぜられなかったためとも考えられる。実際、私自身、試合前と異なり外国人参加者とそうした個人的な会話を交わそうとは思わず、彼らからもそうした関与を求める様子が見られなかったことも、この文脈の共有が日本人参加者間のみ起きたものではなかったことを示唆している。〈エピソード〉の最後に記したように、終了後は私は外国人を含む他の参加者にある種の同胞意識のようなものを感じており、それが共有されていると確信できる実感があった。振り返ってみて、その共有感が単なる思い込みだったと思えないのは、そのときのほかの参加者のふるまいや言動のなかに、そうした私の認識を覆す要素が感知されなかったことに加え、その場所全体の雰囲気として私が感じとった包摂的な文脈性の認知にもとづいてそうした一体感がもたらされたためと思われる。

#### 4.2. 考察2：「場」理論との整合性の検討

本節では、〈エピソード〉から導き出した「メタ観察」(考察1)から、さらにこのイベントにおける参加者間の関係生成の様態と「場」的原理による関係生成のメカニズムの整合度を、主に関係生成の機能的側面から考察したい。

2.1.で示したとおり、「場」を介した関係性の自己組織の存在を示す指標としてつぎの四つの機能的特徴が想定される。

- ①各個人が自己のとりべきふるまいについて一定の決定権をもち、他の構成員と対等<sup>12</sup>な立場で自己表現を行なっている。
- ②各個人の表現が他の構成員と整合的となるよう自己調整され、集団全体としての表現に寄与している。
- ③個人間で身体性を介して、暗黙知のような非記号的情報の共有が行なわれている。
- ④活動の方向性が構成員に内面化され、当事者としての立場から理解されている。

そこで、前節の〈エピソード〉と〈メタ観察〉の記述をもとに、今回の事例にこれらに該当する特質が存在していたかを見ていくことにする。

まず、今回のウォーターバルーンファイトでは、勝敗に関わる要素はないものの、チーム単位で相手の陣地に向け風船を投げるといった行為の方向性が予め明確に共有されるとともに、参加者集団全体としてもイベントを「楽しむ」という共通の目的が存在し、参加者はそのために自発的

に集まってきていた。この参加者らの当事者意識と自発的参加が前提とされている点で、本イベントは④の特徴をもっていたといえる。ベトナム人参加者とドイツ人参加者Fについても、誘われて参加したことが推察できるが、〈エピソード〉で書いたとおり、自身でもイベントの趣旨を理解したうえで自己の意志で参加していたといえる。

つぎに、初対面同士が多く、各自が自由意志から参加し、勝敗にまつわる利害に縛られずに自己の裁量に応じて風船を投げるといった活動の性格上、イベント中に限ってみれば個人は特定の固定的な権力構造に規定されないフラットな関係に置かれていたと考えられる。実際、稿者が参加者間のやりとりから感じとった相互の初次的関係のあり方は、相手に敬意をもって接しながらも力みなく他愛のない内容の会話が成り立つような、和気藹々としたものであった。また、準備から試合、片づけを通じ運営にあたった者を除けば予め決められた役割分担はなく、基本的に自己の取る行動は試合からの離脱を含め各自が決定することを前提としていた。こうした対等な個人間の関係と自由な行為選択の側面は特徴①に合致している。

さらに、そうした個人の表現としての行為、言動、表情などの表出行為は、それぞれの独自性を保持しながらも、試合が進むにつれてある共通の雰囲気醸成される方向へと収斂していく。その「雰囲気」は、稿者には上述のような調和を感じさせる安堵感、充実感とともに、参加者全体の一体感を抱かせるようなものとして感受された。このことは、試合開始から片付けまでのプロセスを通じ、個々の参加者がプレーヤとしての各自の取るべき位置と行為を、チームの他の成員およびイベント全体の動きを見ながら即時に自覚し、それぞれの判断で動きつつも全体の方向性に沿うふるまいをするなかで、チームおよびイベント全体の表現である文脈性がさらに明確となっていったことを示している点で、特徴②と符合する。

因みに、そうした文脈性が自覚的に感じ取られたのは試合が終わってからのことであったことを考察1で述べた。これは、清水のいう「場」の機能面をさす「自他非分離的自己」のはたらしきそのものが、当事者であっても直接的認知がかなわないものであり、場所（状況）の状態を身体<sup>13</sup>を通じて感受することで、はじめて情意をともなった内部感覚として意識に上る性格のものである（清水、1996）ことから、個別の行動主体として局所的作業に集中している対戦中よりも、感覚と情意にかかわる認知のチャンネルが空間全体に対して開かれた試合後においてのほうが、状況全体の様態が雰囲気として感受され意識化しやすくなっていたためと考えることができる<sup>14</sup>。

さて、この「身体性」の機能についてはどうか。上述のとおり、「場」の共有を取りもつ情報は特徴③で提示したような対象化、記号化されない情報として、暗在的なチャンネルで授受共有される。これが個人の身体に「場所」すなわち状況全体の状態として「映し出される」かたちで意識化されるとき、それは場所全体の印象などのような情意をまとった主観的情報となる（清水、1996, p.69）。稿者が感受し、共有されていると感じた会場の「雰囲気」<sup>15</sup>は、まさにこのイベントという「場所」での活動を通じ、「場」の情報として身体性のレベルで醸成、共有<sup>16</sup>された文脈性、意味性の心的表象とあってよいであろう。

以上のことから、本イベントでの参加者間の関係性は、当初の個人間の局所的な関係を結ぶことが前景的な志向性となっていた位相から、個人と参加者集団全体との整合的關係性を志向する集合的位相へと移行したと推察される。すなわち、試合前の顔合わせ、試合本体での活動を通じて局所的な関係への志向が後退し、包括的關係の自己組織を優先的に志向する方向へと関係生成原理を転換することが参加者らに容認された結果、参加者間の関係は自律的に集合的文脈性を帯びるに至ったと考えることができる。そうした集合的文脈性の優位性は、試合後の片づけの時点にも及び、一定の持続性をもつこととなるが、これは、その場の雰囲気を共有していると感じて

いた個人間の自然なやりとりを通じて文脈が確認、強化されたためと考えられる。これらの活動全体を通じ、参加者間には身体レベルでの情報の授受にもとづく状況全体についての認識の共有と個人間の間合いの調整が行なわれ、そうした文脈を創出するための相互作用が暗在的に起きていたと推察される。このことから、記述された参加者間の関係構築には、各個人が「場」の情報を感受したうえで、それに合致する集合的文脈性を集団として共創、刷新していくという、「場」的原理による自律的關係生成のメカニズムが働いていたとみなすことが可能である。

## 5. まとめ

本稿では、稿者自身が参加者として関与するかたちで行なったイベントでの参加者間の関係生成の様態を、「エピソード記述」の手法を用いて一人称的視座から記述し、そのうえで同記述をもとに、観察された個人間の関係性および集合的文脈性の創出と変容についての「メタ観察」を行ない、エピソードに表れた事象の初次的な意味を考察した。さらに「メタ観察」の内容を「場」的原理による関係生成の特徴と照合することで、同プロセスが「場」的原理による自律的關係生成プロセスと機能上合致しており、同イベントで多様な個人からなる集団における「場」的原理による文脈の共創が起きている可能性が示唆されたことを結論として述べた。

本論考では、対象となった出来事における関係生成プロセスの記述に際し、参加者間で展開されたコミュニケーション行為自体の特質と変容のあり方を、行動科学や社会言語学で用いられる、コミュニケーションの諸相に関わる概念により説明するというアプローチはとっていない。これは、観察者自身の主観でとらえた現場の様態を記述していくという「エピソード記述」の本旨に、そうした外的尺度による事象の分節化がそぐわないものと判断したためである<sup>17</sup>。つまり、「エピソード記述」を用いた本論考の企図するところは、自己と分離された視座から出来事の構造を分析することではなく、いわば出来事に包摂され、それゆえにその一部となった観察者の主観の揺らぎを、他者との相互作用を含む出来事の態様の反映として描出していくことにあり、同記述法の採用は、2.2.1.で示したとおり「場」の作用を記述する視座が外部観察にもとづくべきではないという命題に沿った結果であることを改めて強調しておきたい。

関連して、「場」を巡る学術研究の文脈における「エピソード記述」の位置づけにふれておきたい。本稿で採用した「エピソード記述」の志向する「公共性」とは、概念上の普遍性ではなく、読み手が自己の体験に重ね合わせて「あり得る」こと、すなわち可能的真実として納得できる「了解可能性」である（鯨岡, 2005, pp.41-47）。これにより、読み手は同一の経験はなくとも、自己の経験との同型性にもとづいて記述の内容に共感・納得し、自らの研究や実践の糧としていくことが可能となるのである<sup>18</sup>。この意味で、「場」の研究において「エピソード記述」を方法論として用いることの意義とは、「場」を介した関係構築のあり方のモデルを示すとともに、個別のケースで相互にかかわりあう個人にどのような関係性が生成・変容し、創発的な動きへとつながっていくのかを生きた経験として提示することにより、共創の現場に身を置く実践者と研究者に、自らの課題への取り組みのためのヒントと励ましをあたえる契機を提供することにあるといえる。今後、こうした当事者視点によるアプローチにもとづく知見は、実際の多文化組織のマネジメント、地域での多文化共生への取り組み、それらのためのトレーニングなど、幅広い現場で役立つことが見込まれる。

本稿で取り上げたイベントに関し、その非日常性および一過性をともなう性格から、異文化間での「場」生成を論じるための事例としての妥当性に関し、適合性および応用可能性の欠如への

疑念が提起されることが予想される。確かに、同一イベントはまさに日常の文脈を離れた特別な催しとして、限局された時間的、地理的、心理的条件下で実施され、さらに参加者集団に関しても多文化状況として一般化するには偏った文化的要素の布置のもとに構成されていることは明らかである。

一方で、関係生成原理としての「場」が機能するうえで、当該システム（集団）の構成要素の多様性が前提とされ（清水，1999，p.262）ながらも、システムの規模、階層、構成、存続期間、さらに成立の社会的意義や個人のコミットメントに関し、特定の初期条件は求められていないことは考慮に値する。むしろ、人間を含む生命要素間での動的秩序を協働的に生成するための「場」の成立要件となるのが、システム外部の状況変化に即応するかたちで新たな内部秩序を自己組織していくだけの無限定な領域が、システム内部に存在していること（清水，1978，p.339）であり、すなわち、それはシステムの不完結性にほかならない。これに鑑みたとき、新たな文脈の創出といった共創的要素を内包する「場」は、予め強固な統合規範や関係性によって結束した集団よりも、開放系として参画の機会が外に開かれ、行為選択の自由度が個人にあたえられた集団においてのほうが機能しやすいと考えられる。

このことは、自由参加型のワークショップにおける身体表現の協働的創出（三輪，2015）、企業やコワーキングスペースでの異分野出身者間のオープンなコミュニケーションを通じたプロジェクトベースでのイノベーションの展開（伊庭，2006；佐谷・藤木・中村，2012）、地域コミュニティでの多様なプレーヤの参画による新たな地域振興のデザイン（山崎，2011）、いわゆるサードプレイスにおけるインフォーマルなつながりにもとづくコミュニティ意識の形成やそのさまざまな協働行為への敷衍（山納，2016）といった事例に、その具体像を見ることができる。こうした集団に共通するのは、成員間のゆるやかなつながりにもとづいて醸成され、状況の変化に応じ遷移していく「柔らかな秩序」（清水，1999，p.41）の存在であるが、社会における情報化の進展にともない、その編成原理において機能優先型から意味充実型への加速度的なシフトが想定される（今田，2005）なかで、今後こうした明確なハイアラーキー構造をもたないネットワーク型の関係構築の存在は、無視できないものとなっていくと考えられる。一方で、上述のような成立要件を満たしつつも、日常的文脈のなかで特定の成員による持続的な関係性のうえに生成する「場」における共創と創発も存在しつづけていくことが想定される。その態様と成立要因についての考察もあわせて継続していくことが必要であろう。

本稿の最後に、「場」における関係生成プロセス記述法としての「エピソード記述」の適用の限界と課題を示しておきたい。まず、観察と考察にあたり、対象となる事象が「場」的原理によるものと判別する根拠をどこに求めるかを整理する必要がある。すなわち、個人のとった行為や観察者が間主観的に掴んだとみなした状況の態様が、「場」の作用に由来ないしは「場」の生成に寄与するものか否かを識別するための一定の基準が必要であろう。これは、事例の個別性を重視する「エピソード記述」の機能的性格に鑑みれば、何らかの汎用的尺度ではなく、個々の観察者にとっての、「場」の作用を定位するための認知上のスキルのようなものと想定され、したがってこの尺度の担保にあたっては、観察者固有の認知特性に根ざした情報識別の訓練が必要となると考えられる。

つぎに、これと関連して、観察者の認知上のバイアスをどう扱うかである。今回のエピソードの記述と考察でも、稿者はなかば無自覚に「場」の作用と関連づけが可能な事象にのみ選択的に注意を向け認知を行っていた可能性が否定できない。あわせて、「場」の生成メカニズムに沿わない事象を全体的文脈性の生成上無関連なものと捨象している可能性もある。観察内容の解釈

上の問題については、鯨岡 (2013) も、考察である「メタ観察」の記述にあたっては、その解釈内容の妥当性を厳密かつ多角的に吟味する必要性を説いている。また、同時に鯨岡は、「エピソード記述」においては考察内容が観察者＝研究者の経験の蓄積やパースペクティブの変化にともななって変遷しうることも付言している。この意味で、エピソード記述は修練と反芻をともなう学習プロセスであり、安易な完結を求めるべきでないものにとらえる姿勢が必要であろう。

今回は紙幅の制限のため、単一のエピソードのみにもとづいた考察となったが、今後、複数のエピソードを記載したうえで、多角的にそれらに共通する「場」理論との整合性と事例ごとの多様性の扱い方について稿を改めて考察を深めていきたい。

### 謝辞

ゲストハウスのオーナーM氏とスタッフの方々には、観察調査と本稿執筆にあたり格別のご理解と協力をいただいた。心より感謝申し上げます。

### 註

- 1 これらの初期のものとしてはBlumerに代表されるシンボリック相互作用論、Luhmannの社会システム理論、Schützの現象学的社会学などがあげられる。
- 2 ここでいう「集合的文脈性」とは、「場」の作用を通じ個人間に共有される総体的状況の把握と、それにもとづく個人の行動に対する拘束条件の認識 (清水, 1999) による個人の行為間の整合的な関連性をさす。
- 3 いわゆるエントロピー増大の法則に反して生じるこうした要素間の自律的秩序生成は一部の物質的システムにもみられるが、生命システム一般に共通する特質である (清水, 1999)。
- 4 場の生成メカニズムと身体性の関連については河野 (2011) を参照されたい。
- 5 Polanyi (1966) は、事象の認知や創発行為における言語化できない統合的プロセスを成立させる方法知を、「暗黙知」(tacit knowledge) として措定している。
- 6 これを清水は場所的自己言及と呼ぶが、ここでいう自己言及とは、市川 (1993) が「身分け」として示すような、認知対象としての自己が「図」化される以前の、より根源的かつ自律的な分節化による自己認知であると考えられる。そうした自己認知のあり方を市川 (1992) は、我々が対象に没入するときなどにみられる、前反省的意識のレベルで行なわれる「前意識的かつ非措定的な自己」(p.143) の把握として描出している。
- 7 ここでの間主観性 (intersubjectivity) とは、個人の主観を外部から枠づけるように働く、個別主観の共同性や共通性の基礎となる作用をさす (鯨岡, 1997, p.30)。
- 8 鯨岡が関与観察とそれにもとづくエピソード記述を方法論上独自のものと位置づけるうえでもっとも強調するのは、観察者が固有の生活および研究上の経験の蓄積をもつ主体として現場に関わることを是とする立場である。同様の方法論的視座はいわゆる「参与観察」法の一部などにも存在する可能性があるが、少なくとも発達心理学の分野に関して鯨岡がもっとも問題視したのが、観察者を代替可能な「黒子」的存在とみなし、当事者の思いや現場の生き生きとした息吹を捨棄しがちな同分野での、客観主義的視座が当然視される風潮であった。
- 9 それぞれの段階における具体的手順や留意点は紙幅の都合から本稿ではふれないが、詳細については鯨岡 (2005, 2012, 2013) を参照されたい。
- 10 鯨岡 (2005) は、録音や録画による逐語録的記録への全面的依存は、かえって実際の体験内容の「図」化の妨げとなりうるとし、それらの備忘録的な使用を奨励する。
- 11 ゲストハウスオーナーのMによれば、それぞれのベトナム人参加者の日本滞在期間は約1年であった。
- 12 ここでいう「対等」性とは、集団が何らかの関係の秩序を生み出すうえで必要な、表現の自主的な選択

が可能となるのに十分な、(共創行為への参画の有無を含む)ふるまいの自由度が個人に担保された状態をさす。これは「場」による文脈性の協働的創出が、構成員の絶対多様性にもとづく個々の行為間の競合的選択からなされる(清水, 1999, p.105)ものであることによる。清水(1999)は、その象徴的形態例として、サッカーなどプレーヤの自由度の高い集団競技をあげている。

- 13 ここでいう「身体」とは、物理的肉体のみでなく、市川(1992)が示すような、認知、感情、直感といった心的はたらきを含む概念である。
- 14 山口(2002)は、ある事象が意識化されること(触発)の条件として広い意味での「関心」の関与があることを述べ、そのもっとも深いレベルのものとして「気分」などの情緒性をともなう価値づけをあげている(p.156)。
- 15 清水(1999)は、「場の情報」とは、相互に絡み合う多くの発生源があるシステムをつくるために因果律的に発生源を特定できない種類の情報であるとし、そうした情報が表象化されたものの例として「雰囲気」をあげている(p.52)。
- 16 清水(1999)は、身体性を介した場の情報の共有メカニズムを、「引き込み」(entrainment)現象の概念を用い、個人間の意識下に起きる身体的リズムの相互共振作用によるものと説明している(p.85)。
- 17 鯨岡(2013)によれば、関与観察にもとづく「エピソード記述」は、「観察者が観察対象の側に一部組み込まれる」(p.153)かたちで、対象と自己との明確な分離を前提とせずになされる点で、対象により産出されたテキストそのものを分析対象とするエスノメソドロジーや素朴心理学とも方法上一線を画す。
- 18 いわゆる主観主義に関し指摘される一般性ないし普遍性の欠如の問題について論じることは、本稿の目的と異なるため、ここでは深く立ち入らないが、大倉(2008)によれば、エピソード記述がめざすのは、対象となる出来事に関わる(観察者を含む)個人相互の関係性のうえに築かれる、事象の関係依存的了解としての「人間的了解」であり、その意味でエピソード記述の志向する一般性とは、理論の普遍性というより、「理論が私たちの生のあり方やものの見方に何らかのインパクトをあたえ、他の事実を理解するための糧になる」(p.108)ような、経験的事象の了解可能性となる。

#### 参考文献

- Blumer, H. (1969). *Symbolic interactionism: Perspective and method*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall.
- Davies, C. A. (2002). *Reflexive ethnography: A guide to researching selves and others*. London: Routledge.
- 伊庭崇(2006)。「コラボでつくる! : コミュニケーションの連鎖による創発」. 國領二郎(編著)『創発する社会』(68-85頁). 日経BP企画.
- 市川浩(1992). 『精神としての身体』講談社.
- 市川浩(1993). 『<身>の構造: 身体論を超えて』講談社.
- 今田高俊(2005). 『自己組織性と社会』東京大学出版会.
- 伊丹敬之(2005). 『場の論理とマネジメント』東洋経済新報社.
- Kono, H. (2008). *Ba in the American context: An exploration of Japanese in U.S. workplaces*. Unpublished master's thesis, University of the Pacific, Stockton, CA.
- 河野秀樹(2011). 「共空間内〈場〉生成過程における身体性の性格と機能についての理論的考察」. 『目白大学人文学研究』7, 37-59.
- 河野秀樹(2012). 「異文化間における共創的關係の自己組織: 在米日本人へのインタビュー調査からの考察」. 『異文化間コミュニケーション』15, 71-92.
- 河野秀樹(2013). 「文化的多様性への關係論的アプローチ: 『場』的視座からの考察」. 『国際理解教育』19, 62-71.
- 河野秀樹(2014). 「異文化間の自律的關係生成プロセスの記述におけるソフトシステム方法論の応用可能性: 内部記述的視点からの考察」. 『目白大学総合科学研究』10, 95-110.
- 河野秀樹(2016). 「An alternative constructionist approach to intercultural communication: A discussion from the perspective of ba」. 『目白大学人文学研究』12, 23-41.
- 鯨岡峻(1997). 『原初的コミュニケーションの諸相』ミネルヴァ書房.
- 鯨岡峻(2005). 『エピソード記述入門: 実践と質的研究のために』東京大学出版会.
- 鯨岡峻(2012). 『エピソード記述を読む』東京大学出版会.



- 鯨岡峻 (2013). 『なぜエピソード記述なのか:「接面」の心理学のために』東京大学出版.
- 三輪敬之 (2015). 「文化としての共創表現:手合わせ表現を手がかりにして」『第16回 計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会予稿集』1874-1877頁. 計測自動制御学会.
- 三宅美博 (2000). 「コミュニケビリティと共生成」. 清水博 (編)『場と共創』(339-398頁). NTT出版
- 野中郁次郎・紺野登 (2000). 「場の動態と知識創造:ダイナミックな組織知に向けて」. 伊丹敬之・西口敏宏・野中郁次郎 (編)『場のダイナミズムと企業』(45-64頁). 東洋経済新報社.
- 大倉得史 (2008). 『語り合う質的心理学:体験に寄り添う知を求めて』ナカニシヤ出版.
- Polanyi, M. (1966). *The tacit dimension*. Garden City, NY: Doubleday.
- 佐谷恭・藤木稔・中村健一 (2012). 『つながりの仕事術:コワーキングを始めよう』洋泉社.
- Shibutani, T. (1955). Reference groups as perspectives. *American Journal of Sociology*, 60, 6, 562-569.
- 清水博 (1978). 『生命を捉えなおす:生きている状態とは何か 増補版』中央公論社.
- 清水博 (1996). 『生命知としての場の論理:柳生新陰流に見る共創の理』中央公論社.
- 清水博 (1999). 『新版 生命と場所 創造する生命の原理』NTT出版.
- 清水博 (2000). 「共創と場所:創造的共同体論」. 清水博編『場と共創』(23-178頁). NTT出版.
- Sullivan, H. S. (1953). *The interpersonal theory of psychiatry*. New York: Norton.
- 諏訪正樹 (2015). 「一人称研究だからこそ見出せる知の本質」. 諏訪正樹・堀浩一 (編)『一人称研究のすすめ:知能研究の新しい潮流』(3-44頁). 近代科学社.
- 露木恵美子 (2003). 『場と知識創造』北陸先端技術大学院大学博士論文[未刊行].
- 内山研一 (2007). 『現場の学としてのアクションリサーチ:ソフトシステム方法論の日本的再構築』白桃書房.
- 山口一郎 (2002). 『現象学ことはじめ:日常に目覚めること』日本評論社.
- 山納洋 (2016). 『つながるカフェ:コミュニティの<場>をつくる方法』学芸出版社.
- 山崎亮 (2011). 『コミュニティデザイン:人がつながるしくみをつくる』学芸出版社.